

遊びの発展に必要な援助

～友だちの関わりから見えてきたもの～

釧路保育所（愛国弘済保育園）

執筆担当者：松田陽央子 高野里沙 倉内麻衣子

キーワード 自分の居場所 否定 肯定

I. はじめに

遊びが持続出来ないこどもが増えてきたと感じている。子ども同士、遊ぶことは自然なことだと捉えていたので、友だち同士の遊びを深く追求をしたことはなかった。具体的に課題をもって保育士がしかけていく遊び、設定保育の中では、反省や評価をしながら保育を振り返ってきたが、子ども同士の自由遊びについては振り返りをあまりしてこなかったように思う。何かトラブルがあるとその都度保育士が中に入って、解決に導くなど少々場当たりのなところもあった。根本的な解決には、つながっていないと感じながらその場を何となく凌いでいた。

しかし、自由遊びにこそ子どもの姿がよく見えてくる。ごっこ遊びや、工作、かくれんぼなど様々な遊びが展開される中で、すぐふくれる、怒る、威張る、せっかく仲良く遊んでいるのに強引に入ってきて壊すなど、遊びが持続できない、遊びを持続させない子どもがいる。また、混合保育のため、いつも遊んでいる友だちと所属が違うことに納得いかない事例など、日々の忙しさに振り回され、自分の保育が出来ないという悩みを抱えながら、自分はどんな保育がしたいのか、どんな保育を目指しているのか、失敗と反省を繰り返しながら、子ど

もにとってなぜ遊びが大切なのかをつかんでいきたい。

II. 研究の目的

・友だち同士の遊びを通して、子どもが遊びを持続出来ないのは何故か、何が起きているのか原因を探り、子どもにとってどんな保育が必要なのか、本事例を通して明確にしていきたい。

III. 研究の方法

- ・平成25年9月～平成27年1月までの研究
- ・対象年齢 1歳児と5歳児
- ・資料 連絡ノート、保育日誌、保育計画、指導会議録

IV. 事例と考察

【事例1】

（Cちゃん1歳6か月）

＜エピソード1＞

月齢の高いCちゃんは1つ上のクラスの友達と一緒に遊んでいる。

M：「Cちゃんお医者さんしよう！」

C：「いいよ！お腹が痛いんです！」

服をめくってお腹を見せる。

M：「薬をだしますね」

C：「あ！お熱もあります」

M：「体温計で測りましょう！」

とてもスムーズな流れでお医者さんごっこ

を楽しみ周りにいるお友達にも声を掛けて楽しんでる。

M：「今日は〇ちゃんのお誕生日！」
 C：「みんなでごちそう作ろうか〜！！」
 テーブルの上にお皿を並べて食べ物をのせる。
 C：「Happyバースデートゥーユー♪」
 ごちそうを並べ終わると陽気に歌いだす
 Cちゃんと2歳児の子ども達。
 お誕生さんの名前を色々変えてみんなで
 何度も誕生日の歌を歌いごちそうを食べて
 盛り上がる。



<エピソード2>

発表会も近くなり保育士が（以下、保）
 保：「発表会の遊戯練習するよー
 Cちゃんはこうさぎさん（1歳）で練習しようね！」
 C：「Cちゃんは、うさぎさん（2歳）だよ」
 保：「Cちゃんは遊ぶ時はうさぎさんだけど
 本当はこうさぎさんなんだよ」
 C：「Cちゃん何でうさぎじゃないの？」

【資料1】

クラス	人数	状況
こうさぎ組 （1歳児）	17名	4名がうさぎ組と一緒に保育 （Cちゃん含む）
うさぎ組 （2歳児）	12名	うさぎ組12名＋ こうさぎ組4名の 計16名で一緒に 過ごす

【考察1】

いつも2歳児と一緒に遊んでいるのに何で自分だけが違うクラス（こうさぎ組）で発表会の練習なのか全く納得がいかないCちゃん。練習をしても、じーっと保育士を見て目で訴えてくる事が多く踊ろうとはしなかった。普段一緒に遊んでいる2歳児の子どもが自分にとっての仲間だと思っていたようである。

【考察2】

そこでCちゃんの所属を言葉ではっきりさせた方が良いのではないかと感じた。所属を明確にしなければ進級の時にCちゃんが1つ上のクラスの子も達と一緒に進級できないという悲しい思いをしてしまうのではないかという懸念があったからである。その為今まで製作やお絵かきはうさぎ組（2歳児）で行っていたものをこうさぎ組（1歳児）で行うように今後統一し自分の所属をはっきりさせていこうと思った。

<エピソード3：心境の変化>

お絵かきや製作をする時は、こうさぎ組で一緒に行くようにした。発表会練習も始まって、こうさぎ組のお友達と過ごす事が多くなる。発表会練習ではうさぎ組の踊りが好きだったが、こうさぎ組の衣装を見せると、
 C：「うわぁ！Cちゃんこれ着るの！！」
 そう言いながら自分の衣装を大事に抱え込んでいた。家庭でも喜んでいただけがあり、
 C：「ふーわふわのスカートはくんだよ！」
 と母親に伝えていて家庭でも喜んでいて。Cちゃんも一緒に踊るようになった。

【考察3】

こうさぎ組が自分の興味のある事をやっている時は、こうさぎ組である事を喜ぶようになった。発表会ほうさぎ組よりも豪華で可愛い衣装になるように工夫した。少しずつ心境の変化が見られるようになった。家庭でもこうさぎ組のお友達の名前が出るようになったと保護者から言われ、Cちゃん

がうさぎ組だけではなくこうさぎ組との関わりも増えてきたように感じた。こうさぎ組の保育士にも甘えたりおしゃべりする事が多くなり「自分はこうさぎ組」と手ごたえを感じた。

<エピソード4

1歳児と2歳児をつなぐCちゃん>

1歳児はお世話する赤ちゃん。2歳児と一緒に遊ぶ仲間。こうさぎ組と一緒に遊ぶ時間が増えた事によって遊ぶ友達も幅広いものになっていった。Cちゃんと2歳児と一緒に絵本を読んでいる時、

C：「さあ絵本読みますよー

トントントンアンパンマン・・・」

手遊びを始めるCちゃん。2歳児と1歳児が加わり、一緒に「だるまさん」の絵本を読んで動きを真似して楽しんでた。Cちゃんの意識の変化でこうさぎ組と関わる事が増え、そこからうさぎ組と自然な流れで一緒に遊ぶ事が多くなってきた。以前は保育士が仲立ちしながら、こうさぎ組とうさぎ組で一緒にごっこ遊びをする事が多かったが、「ごはん作るよー」という掛け声で始まるCちゃんの遊びに1歳児も2歳児も加わって遊ぶようになった。



【考察4】

仲間意識が芽生えてきたところで発表会練習が始まった。2歳児の仲間とは別々になり納得がいかなかったCちゃんだったが、こうさぎ組である事を受け入れた事によって、結果的にCちゃんがクラスをまとめていき、こうさぎ組とうさぎ組をつなぐパイ

プになってくれた。4人の複数担任のうち新人2人、パート1人を抱えながらクラス運営をしなければならない状況のもと、新入児が多かったのでクラスが落ち着かず、月齢が低くまだ歩けない子どもや、活動的な子ども、泣いているこどもに手がいってしまい目が行き届いていなかった。月齢が高くしっかりした子に、遊びを保障してあげたくて、うさぎ組へ移動させた結果、本来の自分のクラスがわからなくなり、不安感を与えてしまった。また、Cちゃんと十分に遊んであげられなかった事ですぐにCちゃんの思いに気づいてあげられなかった。これを機会にこうさぎ組17名全員が自分のクラスに戻ってきた。気づいた事として、4月はクラスが落ち着かず子ども達の話しを聞いてあげられる環境ではなかった。発表会練習が始まった11月頃にはクラスが落ち着き自分の気持ちを話せる環境であった為、Cちゃんも自分の思いを話すことができ、私自身も声を拾い上げることができたのではないだろうか。小さい子どもながらも状況を感じ、自分の話しを聞いてほしいと思う時は、保育士が十分に受容し共感と余裕がある環境が大切だと感じた。

【事例2】

5歳児クラス

男児11名 女児11名 計22名

(T君：4歳9ヵ月 F君：5歳1ヵ月)

<エピソード1 オレが!!>

F君：「にじのへやで鬼ごっこしよ〜」

T君：「オレもいれて〜」

F君：「いいよ。じゃあ〜鬼決めじゃんけんしよう。」

保：「いいね〜じゃんけんで決めるの〜。誰が鬼になるのか楽しみだね。」

T：「オレがきめてやるよ!!」

F：「じゃんけんで決めようよ。」

T：「オレが決めるって!」

保：「じゃんけんで決めようってルール作ったんじゃないの？」

T：「いいの～オレが鬼やるから～」

保：「F君良かったの？じゃんけんで決めなくて。」

F：「いいの！いいの！Tくんいつもこうだからね。いつまでもゲームはじまらないしね」

(そして次の鬼決め・・・)

F：「やった～Fくんが鬼だ～」

(それから何度か鬼決めじゃんけんが繰り返され中々T君に鬼役がまわってこない・・・)

T：「飽きた！！オレもうやめるわ。」

F：「えっ？まだはじめたばかりだよ」

T：「だってもう飽きちゃった～次はサッカーしようよ」

F：「オレは鬼ごっこがいいな・・・」

T：「あっそ～オレはもうやんないから～じゃあね～」

(そういつてその場からいなくなりました。)

保：「Tくん、今のはないんじゃない？Fくんじゃんけん決めも譲ってくれたんだよね？ゲームは最後まで終わらせようよ」

T：「わかった～また今度ね～」

こうしていつもTくんのペースで遊びもが中断されてしまう。



<エピソード2 合体ロボット>

みんなで集まり廃材を利用したロボットづくりが始まった。ロボット作りはT君が提案。いつもに増してT君が生き生きしている。

T：「ねえ～ここに手をつけたらカッコよくなるんじゃない。」

M：「うわあ～本当だ！T君すごいね」

T：「ねえ～H君もロボット一緒に作ろう」

H：「何つくればいい？」

T：「H君さあ～絵を描くの上手だから目を作ってよ。」

H：「わかった！やってみる！！」

それから毎日自由時間になるとロボットの共同制作がはじまった。

どんどん大きくカッコよくなっていくロボットをみんな大切に思っていた。ある日ロボットの手がとれていた・・・

T：「誰だよ！！これやったの！！」

M：「ぼくたちじゃないよ・・・」

T：「じゃあ！だれがやったんだよ！！M君とH君でしょ！」

H：「ぼくもやってないよ・・・」

保：「もう一回みんなで作ったら？」

T：「もうやらない！M君とH君で作れよ！」

M：「そういつているT君が壊したんじゃないの？」

T：「なんでオレなんだよ！！」

保：「犯人捜ししないでみんなで作り直そうよ」

T：「もういい！オレもうやんない・・・」

M：「まただ・・・」

せっかくみんなで大切にしていたロボットづくりもそこで終わってしまった。

【考察5】

みんなで何かしなければならぬ時、お話を聞く時間になると決まって途中で腰を折ってしまうT君。みんなの前で注意される事も多く、そうなれば素直に話を聞く事も余計にできなくなり自分の中に閉じこもってしまう。思い通りにならなければその場から立ち去ったり、投げやりになってしまったりふくれたりという行動にでてしまう。そのたびにみんなから「まただ・・・」とあきれ顔で見られるT君。それが当たり前の日常となってしまった。本当は伝えたい思いや聞いて欲しい！気づいて欲しい！という思いはあるはずなのに素直になれず最終的にはふかれてしまう。

＜エピソード3 バザー＞

毎年秋に行われるバザーは、各クラスの食べ物屋台の出し物や父親クラブによる園庭での子ども縁日、子どもの部屋というリサイクルおもちゃ売り場と地域交流の場としても毎年にごわっている。そして今日はバザー当日・・・

保：「楽しみにしていたバザーの日だね。欲しい玩具見つかるといいね。たくさんおいしい物も食べて楽しんでね。」

T：「先生～オレ欲しいものあるんだ～」

保：「もう見つけているんだね。買えるといいね」

R：「オレも～」

T：「Rくんもしかして〇〇の剣?!」

R：「そう!! Tくんも?」

T：「オレはベルト! でも剣も欲しいな～」

保：「2人とも欲しい物が買えるといいね。お財布落とさないようにね。楽しんでくるんだよ」

父親クラブの縁日にて・・・

T：「ここ何のお店?」

他父：「おう! Tくん! くじだぞ! やってくか?」

T：「いや! オレスーパーボールやるからいいわ」

他父：「おお～Tくんいっぱい買ったな～」

T：「うん。欲しい物全部買えたんだ～」

それから少し経ち・・・

他父：「T!! 何やってるんだ?!」

(売上金の入っている小銭の缶を自分の鞆にザァ～と入れている)

他父：「こら! どこもってくんだ!!」

(反応を楽しみながら笑いながら逃走。その騒ぎを聞きつけた父親)

父親：「お前何してるんだ!! 何したかわかてんのか?!」

T：「いっぱいお金入ってたから・・・」

父親：「お財布にお金なかったのか?」

T：「いや、まだ入ってる・・・」

父親：「自分が何したかわかっているのか? ダメだってわかってやってんだろう?!」

T：「・・・。」

父親：「あやまりに言ってこい!!」

T：「・・・ごめんなさい。」

(勝手にもってくなよ～。と笑いながら許してくれた他父)

楽しんでいたはずのバザーも最後には父に怒られた事で暗い雰囲気のまま終わった。少し経ち父母揃って保育士と父親クラブの父親たちに謝罪にきた。予想もしなかったT君の行動に両親も落ち込んでいた。

【考察6】

バザー当日を楽しんでいたにも関わらずやってしまうのは何故なのか？人懐っこいT君は行く先々で他父に話し掛けられる事も多かった。T君も他父と遊んだり、話したりするのが大好きだったからである。親しみやすいという事から遊び感覚で売上金を鞆に入れてしまった。叱られる事は承知のうちでおこなっている。両親がいると嬉しさからなのかいつも以上に行動がエスカレートしてしまう。

【考察7】

「家庭との連携」

(父との面談)

家庭での様子はどうか話を聞いてみるとふくれるという事は日常の事のように。父母も忙しい為、話を聞いてあげる事ができていない事を悩んでいた。このままではこの先どうなるかととても心配はしている。T君は父に対して強い憧れを抱いている。保育の中でも父の職業を真似たごっこ遊びをしていたり、父のように力強くかっこいい男になりたいという思いが強い。そこで、お迎えの時に父親に面談をお願いしてみた。T君の話をじっくり聞いて欲しいという思いから、父と一緒に風呂に入ってもらい話を聞く時間を作ってもらったり、野球が共通して好きな事から一緒にキャッチボールしてもらったり、戦いごっこの相手役を引きうけてもらい体をたくさん触れ合っただけで遊んでもらえる様提案を試みた。期間を短期間にしぼった。T君の変化を見てみたいとの思いと、変化が見られなければすぐに保育プランを変更していけるようにと約二週間に限定してみる。

【考察8】

「保育の見直し」

家庭での話を聞き保育園でもT君と向き合い方を見直す。T君の行動をよく観察してみる事からはじめる。どういった状況の時にそうになってしまうのか、T君が伝えたい！聞いて欲しいというサインを見逃してしまっているのではないか。自由時間を利用して何気ない会話をする事からはじめてみた。はじめは長い時間話が持たず、すぐにその場から立ち去ってしまったが根気よく話かける事で日に日に二人で話す時間も長くなってきた。友だち同士のトラブルの様子をみても、気持ちを伝えられないままにいる事が多いため仲立ちに入ったり別室を設け二人で話し向き合う機会をつくらせてみる事にした。保育を見直す事によりT君に変化は見られないかをみてる事にした。

それから2週間・・・



<エピソード4 合体ロボット②>

T:「H君このロボットもう一回作らない？」
(思いがけないT君からの提案にビックリした表情をみせるH君。)
H:「でも、もう壊れちゃっているよ」
T:「大丈夫！この手とこっちの手つなげて

長くして～、こっちの手新しくしよう」
H：「なんか前より強くなったね！！」
H：「じゃあ～こっちの手オレがつくる！」
T：「こっちの手長くしたのオレだからオレ
がやる！！」
H：「まだ・・・」
(少し悩んだT君・・・)
T：「ねえ、やっぱり一緒にここやろう！H
君は絵も上手だからカッコよく色塗り
もしてよ。オレも手伝うよ」
H：「T君すごいね。壊れたからもう直らな
いかと思ったのに前よりカッコよくな
ったね。」
T：「前のとは違うけど変身したみたいじゃ
ない」
T：「どんどん変身させてってカッコいいロ
ボットにしよう。」
(前よりも大きく変化したロボットをみて
みんなと一緒に遊びたいと言い出した。)
T：「じゃあ～みんなで作ろう！！
M君はここを作ってくれる。H君は
顔作ってよ。」
(T君の指示のもとロボットはどんどん変
化していった。心なしがT君も生き生きと
自信に満ち溢れている。)



【考察9】

(家庭から)

母から連絡帳を通して二人の変化について綴られていた。はじめは父事態も手探りの状態でT君もいつも以上に自分に熱心な父に戸惑っていたという。話をする事が出来るのかと心配していたが、父の熱心な働き掛けがT君にも伝わっていき、日を増すごとにお風呂の時間がどんどん長くなっていったという。お風呂を終えてでくるT君の表情がどこかすっきりしていて、それと同時に父もすっきりした表情を浮かべていたという。お風呂の中で話しをする事が二人には当たり前の事の様になっていったのだと母は嬉しそうに連絡帳に書いてあった。遊びの面でも父からはもちろんの事T君自身が父親という存在がより近いものを感じられたのか自分から体でぶつかっていき戦いごっこをくり広げ二人でどんどん遊びが発展していったのだという。父を通してT君の奥底にある気持ちを母も知ることができ、T君について父母が会話をすることも多くなったという。そして何より、T君が家庭で思いをぶつけるようになり気持ちが満たされ落ち着いてきたように思える。

【考察10】

(保育の中で)

みんなの前で叱るという行為をやめ、ふたりにゆっくり話す時間をつくるようにした。はじめはそれでも話を聞けなかったり、すぐにふくれていたが、繰り返し受け止め向き合っていくことで徐々に自分の思いを話すようになっていった。話をする事で情緒が安定し、友だちとの接し方にも変化が見られた。すぐふくれるT君が友だちの話を

最後まで聞けるようになり、いつもなら「もういい」と投げやりになるT君が話を聞けるようになった事で最後まで遊びが成立できなかった問題も解決する事ができ、友だちからみるT君の印象も変化してきた。本来遊びをつくりだすのが得意なT君のまわりには自然と人が集まるようになっていった。

V. まとめ

自由遊びの時、こどもはよくトラブルを起こす。トラブルの原因は様々であるが、自由遊びの中のトラブルにこそ、子どもの抱えている問題がかくされていると感じた。

事例1は普段遊んでいる友だちとクラスが違うことに納得できない内容である。私たちは問題をよく起こす子どもに注目しがちだが、ここでは逆にしっかりとしているが故に声を聞くことが出来なかった、もっと保育者が子どもの遊びに加わり、話が出る環境を作ることが出来たなら、という思いと、どんなに小さくても4月5月のクラスの落ち着いた状況を感じ取っているのだ、ということに気がついた。なぜ発表会の頃(11月)に言ってきたのか、それはクラスも担任も落ち着いてきたから言えたのではないだろうか。

事例2では主導権を握りたがり、思い通りにならないとすぐふくれてしまい、遊びが続かないという実践内容である。とにかく自分に注目してほしい、自分の気持ちを受け入れてほしい、否定してほしい、という欲求が強く出ている。人を惹きつける力が十分にあり、困っている友だちを放っておけない親分肌だが自分に自信がない

T君。何とかしてあげたい、何とかしなければ、という思いから、保育の見直しと家庭への働きかけを実践した。

子どもの発達に応じた様々な遊びを促すことは大事な事だが、ただ与えるだけではなく、周りから受け止めてくれる心地よさを感じさせ、得意な部分を伸ばしていくことが大切だと実感した。やがてそれが自信となり遊びをどんどん発展させていけるのではないだろうか。こどもにとってどんな保育が必要なのか、そのままのこどもの姿を受け入れ、理解し、遊びの中で育てているものを捉えて支えていきたい。自己肯定感を育てていきたい。そのような保育を目指していきたいと感じている。

【参考文献】

- ・加藤繁美著『保育者とこどものいい関係』
ひとなる書房(1993)
- ・加藤繁美著『対話と保育実践フーガ時代と切り結ぶ保育観の研究』
ひとなる書房 (2009)
- ・鯨岡峻・鯨岡和子著
『エピソード記述で保育を描く』
ミネルヴァ書房 (2009)
- ・加藤繁美著
『記録を書く人 書けない人 楽しく書いて保育が変わるシナリオ型記録』
ひとなる書房 (2014)
- ・研修会資料より
大豆生田啓友「実践に生きる保育研究」
(2013)